

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.153

2012/08/22

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

8月4日滋賀県主催の「山門水源の森」現地交流会が開催された。定員100名に対して128名の参加となり計画当初心配された参加者数は軽くクリアした。今年のテーマは、琵琶湖とその背後を考えると、その指標として「ビワマス」を取り上げた。講師には琵琶湖博物館総括学芸員の藤岡康弘氏（「川と湖の回遊魚ビワマスの謎を探る」サンライズ出版の著者）をお願いした。

山門水源の森を水源とする大浦川に琵琶湖の固有種であるビワマスが遡上産卵していることは衆知の事実であるが、その背景と集水域の環境保全の重要性を広く認識してもらうためである。滋賀県内の各地で地域興しと関連づけた「ビワマス」が注目されているが、山門水源の森にとって大浦川「ビワマ

ス」は環境保全の1つの指標である。別の観方をすれば大浦川の「ビワマス」は、琵琶湖の環境保全の1つの指標でもある。古くから日本各地の海岸地域には『魚つき林』という考え方がある。藤岡氏のお話は、**・琵琶湖の環境とびわ湖の生き物の多様性・多様な生き物に支えられた漁業と食文化・ビワマスの生活史・ビワマスにとってのびわ湖の森・びわ湖の生き物を支えるびわ湖の森**という内容で、私たちがこれから目指さねばならない森の保全活動の指針を示してもらったことになる。参加者は、（長浜市43大津市26草津市7彦根市7高島市4栗東市4守山市2 東近江市2 野洲市1）大阪府18名京都府5名愛知県4名兵庫県3名福井県1名三重県1名と広範な地域からでした。参加者の感想には、今後保全活動に参加したいというものや森とびわ湖の繋がりをビワマスを通して理解できたのが有り難い等々一定の成果があったと思われる。



今月も多くの人たちと共に保全活動

7/21 滋賀県主催の「平成24年度協働の森づくりの啓発事業 びわ湖水源の森づくり活動」として『山門湿原を守るお手伝いをしよう』の呼びかけに本会会員も含め 30 余名が中央湿原奥の除伐作業を行いました。



インターンブリター ブルックも保全作業(12/07/24)



びわ湖水源の森づくり活動の参加者(12/07/21)

7/18 から滋賀県立大へ来ているミシガン州立大学連合の学生ブルックがインターンシップで 6 日間研修に来ました。多くの会員と交流するとともに、日ごろ私たちが行っている保全作業を体験しました。非常に積極的な学生で多くのことを学び取ったようです。お世話して貰った会員のみなさんありがとうございました。

8/3 には西浅井中学の先生方が、研修会ということで保全作業来てもらいました。猛暑の中、慣れない保全作業お疲れさまでした。63.5ha の森の保全というのは、会員個々にとっては無限大に感じられる面積です。こうした多くの皆さんの協力が無ければ『ピワマスの遡上が続く大浦川』の集水域の環境保全は続けられません。勿論この間会員も砂防作業・観察コースの補修・食害防止ネットの交換・補強・「やまかど・森の楽舎」付属湿地の除草(これだけでも 15 人手間が必要なんです)・湿原の定期調査・天然更新試験地の植生調査等々森の仕事に際限はありません。何とか対応出来ているのには、国の緊急雇用対策事業で 3 名の作業員(森林キーパー)が活躍してくれているおかげです。この事業は今年度限りですから、来年度を考えると課題山積みといった状況です。



西浅井中学教員研修会(12/08/03)

訪問者は盛夏も続々と・・・

保全活動の傍らに実施しているガイドだが、本会発足当時は年に数回程度であったものが、今や要請を断らなくてはならない状況になってきた。今年度も 6 月のササユリのシーズンやこれから迎える紅葉シーズンは、大変な数の申込で心ならずもお断りをしている状況である。断っている理由は、もともと保全活動を主体に考えてきた本会であるのにも関わらず、ガイドに追われる状況は本末転倒ということが大きい。また来訪者数が増加することで、自然への圧力が増大する。特に観察コ



狭いピオトープだがこの管理にも大変な人手が・・・(12/08/15)

ースの傷みが増大し、その補修に人手を要するという悪循環。加えてコース沿いの植物の踏み付け・パイオトイレの許容量等々だが、更にガイドの人数不足ということもある。本会としては、保全活動に従事できる人員確保が難しいのであれば、いよいよ来訪者の人数制限を滋賀県とも相談しながら本気で考える必要性に迫られている。

増殖のミヤコアザミ營のる

2009 年に再確認され、採種・播種した実生の生育が順調で今營を付けています。これで『絶滅』は回避出来たようです。



ミヤコアザミの營



奥びわ湖観光協会主催ハイキング(12/08/13)